Anchor's PERSON

藤田土木建設　有限会社
代表取締役

藤田　博志

社会的にアスベストの危険性が認知されるようになってきたころ、
いち早くアスベスト除去工事に着目し、建築業の傍ら独自に学び始めたいう藤田社長。
「当時はかなりの時間を勉強に費やしましたが、一銭にもなりませんでした」と笑ってみせる。
だが今ではアスベスト除去工事では西日本屈指の規模を誇る。まさに先見の明――。
「アスベストの影響で解体できずに放置されている建物がまだ多くある」と前を見据える社長。
未来により良い環境を残すため、果たすべき役割がある。これからも歩みを止めない。

「未来により良い環境を残すため、私共が果たすべき役割がまだあるのです」

© 2020 HOUDOU-TSUSHINSHA Co.,Ltd.

代表取締役
藤田 博志

special × interview

タレント
布川 敏和

安心・安全の環境を次世代につなぐ――アスベスト除去工事のエキスパート

土木・建築会社として50年以上の歴史を数える『藤田土木建設』。現在の藤田社長は、10年ほど前に先代である父親の後を継いだ二代目だ。社長は高い経営手腕で、長く続いた不況の煽りも受け、倒産寸前の状態に追い込まれた同社の立て直しに尽力し、見事V字回復を成し遂げた。本日は布川敏和氏が社長のもとを訪れ、V字回復達成の裏に隠された様々なストーリーに迫った。

藤田土木建設 有限会社
広島県福山市神辺町字湯野512-1

――『藤田土木建設』さんは随分長い歴史をお持ちだと伺いました。

当社は先代である私の父が創業し、50年ほどの歴史がある会社なんです。一般的な建築や土木の仕事を手掛けてきて、バブル期は旺盛な建設需要により売上の伸びが著しかったようです。

――では、藤田社長は学業を終えてすぐ家業に入られたのでしょうか。

はい。建設関係の学校を卒業してすぐに父のもとで仕事をするようになりました。けれども次第に会社の方向性を巡って意見が食い違うようになり、袂を分かつことに。というのも、先代は接待も含めた営業活動で受注につなげるというやり方だったんです。バブルの時代まではそれが当たり前だったのかもしれませんが、時代は変わってきている。言い方は悪いですが、「お金を使って仕事を取る」という時代ではない。もちろん付き合いも大事ですが、私はまず良い仕事を納めて信用を得て、次の仕事につなげていきたいと思っていたんです。先代には先代の考え方、やり方があるとは思いますが、私にも信念がありますからね。そこは譲れませんでした。

――なるほど。それでお父様のもとを離れてどのような道に進まれて？

独立を選びました。最初に手掛けたのはダム建設の現場で、1～2年ぐらいかかったでしょうか。小さい工事でも1カ月ぐらいかかるような長期の現場が多かったですね。そうして家業とは別々に仕事をしていたのですが、10年ほど前に実家から「業績が悪化しているから、帰って手伝ってほしい」と連絡がありまして。

――社長に家業立て直しの白羽の矢が立ったと。実際にどのような状況だったのでしょうか。

思った以上に深刻で、銀行が取引を停止するような状況でした。そこから様々な手を尽くし、5年ぐらいかけて立て直してきたんです。具体的には、従来の建築・土木工事もこなしつつ、徐々にアスベスト除去処理工事にシフトしてきたんです。最初は少しずつでしたが、今ではこの分野では西日本でも有数の規模になりました。

――アスベスト除去処理工事に特化されたことが、V字回復の要因だったというわけですね。

取り組み始めた当時は、アスベスト関連の法律ができたばかりのころ。社会的に、アスベストの危険性が広く認知されるようになっていました。そんな時、産廃処理の分野でアスベストを専門にしている友人がいたので、そちらで教わりながら、自分でも勉強をして知識や技術を吸収していきました。当時は時間を取られるばかりで一銭にもなりませんでしたけれど（笑）。

――（笑）。けれども、それが今になって活きてきたということですね。

ええ。実は徳島県に今から20年ほど前に閉業したボーリング場があって、天井裏にびっしりとアスベストがあったのですが、どこの業者でも解体ができないということで自治体が困っていた状況がありまして。それで長年放置されていたのですが、たまたま私にお話があり、天井裏にダム工事で使用するような特殊な足場を組んでもらって、アスベストの除去工事を行ったんです。それで自治体の方が驚かれてお仕事を紹介して下さるようになり、そこからあちこちの公共工事を依頼されるようになりました。

――良い仕事をして、次につなげる。社長の信念通りですね。

はい。それまでは1千万円の工事でも大きかったのですが、その後はアスベストだけで単価が2倍、3倍になり、今はビル1棟で数千万円という現場もあります。その中で最先端の機械なども揃えて設備投資を行ってきたので、それがまた同業他社との差別化になりました。

――ご苦労もあったと思いますが、全てが上手く回るようになってきたと。

偶然かもしれませんが、実は事務所に鳩が来るようになってからアスベストの仕事が入るようになり、良いことばかり起こるようになったんです。

――幸運を運んできてくれたのかもしれませんね（笑）。でもやっぱり、一番は社長がコツコツ努力を積み重ねてこられたことの賜物ですよ。今後もアスベストの工事をメインにされていくご予定で？

アスベストも含めて、環境保全という分野で地域社会に貢献していければと思っています。今はダイオキシンも大きな問題となっており、全国の自治体では190ぐらいの焼却場が解体できないまま放置されていると聞いています。

――かなりの数ですね。

ええ。民間も含めれば、もっと大きな数になるでしょう。アスベストの問題も絡んできますし、これまでの現場で培ったノウハウを活かせると思うので、これからはそちらのほうも手掛けていきたいと考えているんです。九州のほうにダイオキシンの問題に取り組んでいる会社があるので、そちらで勉強をさせていただくつもりなんですよ。

――次世代のことを考えれば、とても大事なことですよね。

そうですね。先ほども申し上げましたが、全国にはアスベストやダイオキシンの問題で解体できない建物がたくさんある。当社でも技術を磨きつつ人材を増やして対応していければと思っています。

（2020年9月取材）

Pick up the story

調査から工事、処分までトータルに手掛ける

▼建物を解体する時には、あらかじめアスベストが使用されているかどうか調査し、使用されていた場合は大気汚染防止法に基づいてアスベストを除去しなければならない。『藤田土木建設』では、アスベスト調査から各省庁への届出書の作成、除去工事、処分まで一貫して行っており、公共工事から民間工事まで、多くの実績を誇っている。

▼「一昨年ぐらいには、アスベストの仕事も後5年ぐらいで減っていくだろうと言われていたのですが、吹き付け塗料にもアスベストが含まれていたことが見つかり、それも除去しないといけなくなったんです」と藤田社長。その塗料を溶かす特殊な液体は限られたルートでしか手に入らないそうで、広島県内では同社しか施工できないという。

▼一時はホームページを立ち上げたり、営業に回ったこともあったが、今は役所関係からの紹介が多く、営業をしなくても仕事が途切れなくなった。手掛けてきた一つひとつの現場が、次へと結びついている。

「一度はお父様と離れてお仕事をされていた藤田社長ですが、家業の危機を聞きつけて戻ってこられ、見事事業を立て直されたのは素晴らしいですね。アスベスト除去の工事については、まだまだ需要があるそうなので、これからが楽しみです。40年ほど前、10～20代のころはボクシングをされていたという社長。当時のお話も伺うことができ、楽しかったです！」　布川 敏和・談

© 2020 HOUDOU-TSUSHINSHA Co.,Ltd.